

**東** 京湾で獲れる豊富な魚介類は「江戸前」と呼ばれ、かつては大都市・江戸の食生活を支えていた。しかし近年は埋め立てが進められ、東京湾のほとんどの干潟や浅瀬が失われた。埋め立て工事がなくなり水質は改善しつつあるが、海と人との距離は遠のいている。

NPO法人さざなみ（千葉県習志野市）は、東京湾最奥部の海や山を舞台に、海辺の清掃や里山の保全、環境教育に取り組んでいるグループだ。

「東京湾は習志野に生まれ育った僕にとっては故郷の海。その魅力は人々の生活と海辺の距離が近いところにあります。青森県の大学病院に勤めたあと2019年に故郷に戻り、ごみが大量に漂着している海辺を見て、人と自然が触れ合えるようにしたいと有志でごみ拾いを始めました。僕たちは環境保護団体ですが、趣旨はまちづくりです。大人が子供を見守り、安心して住める街・環境にしていきたい。安定した運営を支えるため、22年10月にNPOを設立しました」と、島田拓理理事長は話す。消化器外科専門医の島田さんをはじ

人の共存を目指す「さざなみ農園」を25年に開園する計画だ。田畑と山林を復元して里山を守り、環境教育に役立つこの活動は、セブーン・イレブン記念財団の助成でおこなわれている。「住める環境を作ったらタガメを復元できるんじゃないかと話していたのが、山の活動のきっかけです。そこからキャンプや自然観察会もしたいねと広がりました。米が獣害に遭うなどいろんな問題が起こりますが、クヌギやコナラを植え、護岸を整備して、30年、40年後の子供たちが遊びながら生命に対する大切なことを学べる場になったら幸せだと思います。活動方針は『自分の街を好きになる』。気候変動、海洋汚染、森林の消失、争いや貧困などの世界の問題も、まずは身近な社会に目を向けることから始まります。街を知り、好きになってはじめて、いろんな問題を自分のものとして考えられる。生きている環境を大切にする責任ある大人になるというコンセプトです」（島田さん）



無農薬での米づくり。水田環境は絶滅が危惧されるトウキョウサンショウウオやトノサマガエル、ゲンゴロウなどの保全にも繋がる



2025年の開園に向け始動した「さざなみ農園プロジェクト」。バーベキュー場やキャンプ場が設けられた他、農園入り口には「環境再生型農業」を謳う看板が



里山は生き物が多く、キャンプや自然観察ができて学ぶことが多い



作業小屋や足場も自分たちで作る。貴重な自然体験の教育の場に



ごみ拾いを通じた環境教育



海辺に押し寄せる海洋プラスチック



医師など専門家が多数さざなみのスタッフ一同



2023年3月の定例清掃。定期的な清掃活動は見守りに繋がり、治安上も意味が大きい

## NPO法人さざなみ 「海」×「里山」×「教育」 3つを繋ぐまちづくり

め、専門家が多いのがさざなみの特徴だ。20年春に最初に発足した「習志野の海を守る会」の活動を引き継ぎ、①海辺の保全と再生、②里山や希少生物を保全する「房総再生プロジェクト」、③教育支援、という海・里山・教育の3つの事業を、NPOが支援する。「もともと僕自身、ある程度仕事をコントロールできるようにしたら社会活動をしたとは考えていたんです。でも今は、医師が環境や社会貢献に関心を持つことについて明確に意識しています。人間は健全な環境がなければ生きられません。環境の保全や持続可能なまちづくりと、健康な生活をサポートする医療は、じつは目的が一緒なんです。今は東京湾再生官民連携フォーラムにも参加して、人対人の信頼関係を大事にしながらプロジェクトを増やしています。海と山の繋がりを意識して始めたのが里山の保全活動です」（島田さん）

千葉県富津市亀沢地区の耕作放棄地の管理を引き継ぎ、21年から無農薬での米作りと山林の整備を始めた。同市上地区の耕作放棄地も取得し、自然として、一緒に取り組んでくれる仲間を増やしていきたいという。「NPOとしては2年目ですが、じつはベースになっているものは結構古い。79年生まれ僕たちは、東京湾の海辺で泥だらけになって遊んだ体験を持つ最後の世代なんです。さざなみ創成期のメンバーは原体験を共有しており、街と干潟の歴史を語り継ぎたいという夢を抱いています。生き物や生命に対する畏敬の念は、自分の手で触れないと生まれないものなんですよね。人間もいろんな生命の働きがあつて生かされているということを、伝えていきたいと考えています」（島田さん）

88年に国の鳥獣保護区に、93年にラムサール条約の登録湿地になった習志野市の谷津干潟は、東京湾の開発が進むなか、市民の保護活動によって残された約40haの干潟だ。1年間に110種以上の野鳥が見られる。街の歴史を知る島田さんたちは、安心して暮らせる環境を子どもたちに伝えていく。

